

[D年] 聖霊降臨節第4主日(2020年6月21日)

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

【旧約聖書日課】ハバクク書2章1~4節

ハバクク書2章1~4節

- 1 わたしは歩哨の部署につき
 砦の上に立って見張り
 神がわたしに何を語り
 わたしの訴えに何と答えられるかを見よう。
- 2 主はわたしに答えて、言われた。
 「幻を書き記せ。走りながらでも読めるように
 板の上にはっきりと記せ。」
- 3 定められた時のために
 もうひとつの幻があるからだ。
 それは終わりの時に向かって急ぐ。
 人を欺くことはない。
 たとえ、遅くなっても、待っておれ。
 それは必ず来る、遅れることはない。
- 4 見よ、高慢な者を。
 彼の心は正しくありえない。
 しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

- 1 私は見張り場につき
 砦の上に立って見張りをしよう。
 主が私に何を語り
 私の訴えに何と答えられるかを見よう。
- 2 主は私に答えられた。
 「この幻を書き記せ。
 一目で分かるように
 (直訳→それを読む者が走るために)
 板の上にはっきりと記せ。」
- 3 この幻は、なお、定めの際のため
 終わりの時について告げるもので、
 人を欺くことはない。
 たとえ、遅くなっても待ち望め。
 それは必ず来る、遅れることはない。
- 4 見よ、高慢な者を。
 その心は正しくない。
 しかし、正しい人はその信仰(別訳→真実/誠実)
 によって生きる。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一2章22~29節

ヨハネの手紙一2章22~29節

22偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者でなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。23御子を認めない者はだれも、御父に結ばれていません。御子を公に言い表す者は、御父にも結ばれています。24初めから聞いていたことを、心にとどめなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内にもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にもいるでしょう。25これこそ、御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命です。

22偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくて、誰のことでしょうか。御父と御子を否定する者、これこそ反キリストです。23御子を否定する者は皆、御父を持たず、御子を告白する者は、御父を持っているのです。24初めから聞いたことが、あなたがたの内にとどまるようにしなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内にとどまるならば、あなたがたも御子と御父の内にとどまります。25これこそ、御子が私たちと交わされた約束、永遠の命です。

26以上、あなたがたを惑わせようとしている者たちについて書いてきました。27しかし、いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教える必要がありません。この油が万事について教えます。それは真実であって、偽りではありません。だから、教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい。

26あなたがたを惑わす者たちについて、以上のことを書きました。27あなたがたの内には、御子から注がれた油がとどまっているので、誰からも教える必要はありません。この油があなたがたにすべてのことを教えます。それは真実であって、偽りではありません。ですから、その油が教えたとおり、御子の内にとどまりなさい。

28さて、子たちよ、御子の内にもいつもとどまりなさい。そうすれば、御子の現れるとき、確信を持つことができ、御子が来られるとき、御前で恥じるようなことがありません。29あなたがたは、御子が正しい方だと知っているなら、義を行う者も皆、神から生まれていることが分かるはずです。

28そこで、子たちよ、御子の内にとどまりなさい。そうすれば、御子が現れるとき、私たちは確信を持ち、御子が来られるとき、御前で恥じるようなことがありません。29あなたがたは、御子が正しい方だと知っているなら、義を行う者も皆、神から生まれていることが分かるはずです。

新共同訳

【福音書日課】ヨハネによる福音書3章22～36節

²²その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行き、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられた。²³他方、ヨハネは、サリムの近くのアイノンで洗礼を授けていた。そこは水が豊かであったからである。人々は来て、洗礼を受けていた。²⁴ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。²⁵ところがヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こった。²⁶彼らはヨハネのもとに来て言った。「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあなたの方へ行っています。」²⁷ヨハネは答えて言った。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。²⁸わたしは、『自分はメシアではない』と言い、『自分はその方の前に遣わされた者だ』と言ったが、そのことについては、あなたたち自身が証ししてくれる。²⁹花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。³⁰あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」

³¹「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。³²この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。³³その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる。³⁴神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が“霊”を限りなくお与えになるからである。³⁵御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。³⁶御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨハネによる福音書3章22～36節

²²その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行き、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられた。²³また、ヨハネは、サリムに近いアイノンで洗礼を授けていた。そこは水が豊かであったからである。人々は来て、洗礼を受けていた。²⁴ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。²⁵折しも、ヨハネの弟子のある者たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こった。²⁶弟子たちはヨハネのもとに来て言った。「先生、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあなたの方へ行っています。」²⁷ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられなければ、何も受けることはできない。²⁸『私はメシアではなく、あの方の前に遣わされた者だ』と私が言ったことを、まさにあなたがたが証ししてくれる。²⁹花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人は立って耳を傾け、花婿の声を聞いて大いに喜ぶ。だから、私は喜びで満たされている。³⁰あの方は必ず栄え、私は衰える。」

³¹上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。³²この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、誰もその証しを受け入れない。³³その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確かに認めたのである。³⁴神がお遣わしになった方は、神の言葉を語られる。神が霊を限りなくお与えになるからである。³⁵御父は御子を愛して、その手にすべてを委ねられた。³⁶御子を信じる人は永遠の命を得る。しかし、御子に従わない者は、命を見ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」

黙想のためのノート

次主日聖書日課について

・6月21日「聖霊降臨節第4主日」の日課主題は「信仰の道」。

・聖書中、「信仰」の訳語は、新約では239節で用いられるのに対して、旧約では7節で用いられるのみであり、「信仰」という概念そのものが新約に特有のものである。もちろん、旧約において「信仰」と訳される原語「エムナー／エムーン」とその語根「アーマン」（アーマン）の用例は決して少なくないが、多くの場合に「忠実／真実／誠実／まこと」などと訳されている。一方、新約において「信仰」と訳される原語「ピステイス」にも「忠実／真実／誠実／信頼」などの語義が含まれており、訳し分けるべき理由のある場合も少なくないが、ほとんどの場合に「信仰」と訳されてきた。このような翻訳上の偏りが見られるのは、キリスト教史上、「旧約」と「新約」を分け、「ユダヤ教」と「キリスト教」を分ける概念として「信仰」が意図的かつ恣意的に用いられてきたということを見無視できない。いわゆる「律法か信仰か」という二項対立的概念を、キリスト教会がアイデンティティを確立して正統性を主張するようになる過程で、強調してきたのである。

・「新約」における「信仰（ピステイス）」の用例は、もっぱら使徒パウロの書簡をはじめとする「使徒書」に偏っており、「福音書」中では驚くほど用例が少ない（ヨハネ福音書には用例がない）。このような偏りがあるとしても、「新約」の著者ら初代教会が「ピステイス」を「旧約」の「アーマン」およびその派生語の訳語として連続性をもって理解していたことは間違いないだろう（七十人訳ギリシア語旧約聖書で、訳語として「ピステイス」が用いられている）。実際、「新約」において「ピステイス」は、日本語の「信仰」という用語の意味する内容をはるかに超えたより一般的な対人関係性を指し示す用語として用いられているが、それは、「旧約」における「アーマン」およびその派生語の用いられ方と軌を一にすることである。

・このような訳語上の問題から、20世紀の聖書神学で注目されていたのが、「ローマの信徒への手紙」や「ガラテヤの信徒への手紙」で中心教義とされてきた、「イエス・キリストを信じることにより・・・与えられる神の語」（ロマ3:22）、「ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」（ガラ2:16）という聖句である。ここで「イエス・キリストを信じること」あるいは「イエス・キリストへの信仰」と訳されているのは、いずれも「ピステイス・トゥー・イエス・クリストウ」というギリシア語表現で、「イエス・キリスト」の属格で「ピステイス」が修飾されている。このような場合、ギリシア語文法では、属格で表される語を「目的格的」にも「主格的」にも用いる。すなわち「イエス・キリストの信仰」とも「イエス・キリストに対する信仰」とも訳しうる。しかも、文法上、明確に峻別できない。そこで、「聖書協会共同訳」はこの翻訳

上の問題を回避するために、これらの箇所を「イエス・キリストの真実によって」と訳し、「ピステイス」に「信仰」の訳語を充てていない。このような翻訳の採用は、神学上の議論を回避させてはいるが、パウロらが重要な用語として用いている「ピステイス」の概念を読者が理解するための助けになっているとは言えない。

旧約日課（ハバクク2章より）

・「ハバクク書」は、「十二小預言書」中8番目に置かれた預言書であるが、「預言者ハバクク」について歴史的に同定しうる情報が記されていない。一般的には、1:6の記述などを根拠に、バビロニア帝国（カルデア人）が台頭してくる頃、預言者エレミヤと同時代の預言者と考えられている。預言者としての情報が乏しいにもかかわらず、ユダヤ教においても本預言書は、2:4の聖句を中心にラビたちによって繰り返し取り上げられている。2:4は「ローマの信徒への手紙」1:17で使徒パウロが引用しており、当時すでに、おそらくファリサイ派系ラビたちの教えの中で引用されることの多い聖句であったのだろう。キリスト教会でも、日課箇所は、本預言書の中心主題を述べた部分として解釈されてきた。

・本預言書は、「預言書」集の中に置かれ、タイトルに「託宣」とあるにもかかわらず、いわゆる「主の言葉」を預言として告げる部分は限られ、ほとんどが預言者の「信仰告白」あるいは「祈り」のような形式で記されている。3章は明らかに「詩編」に近い形式で作られ、用いられていた文書であると考えられる。その中において、日課箇所は、明確に「主」の告げられた言葉として記されていく。

・2節「幻を書き記せ」と始まる主の答えの中で、3節に「もうひとつの幻がある」と重ねられている。この二つの「幻」が、具体的に何を指しているのかは、明確に語られていない。「幻」は、一般に黙示文学に見られるような幻視を指しているわけではなく、ここでは神からの啓示を意味しているのだろう。そこで、ここでは、すでに示されている「啓示」と、今後さらに新たに示される「啓示」という意味で、「幻」が重ねられていると考えられる。つまり、神からの示される事柄は、すでに示されたことと、これから示されることとに分けられる。ここでは、特に「終わりの時」という終末的視点が示されており、神がすでに始められた創造の御業に加えて、それを完成される最終的な御業があることに視座を据えることによって、現在の「中間時」的な曖昧な状況の中においてなお耐えて生きていく「信仰（エムナー／アーマン）」の道を確認するものとしてしようとしている。

・2節「書き記せ」という指示には、これまで「幻」が必ずしも書き記されてこなかったということ、そして、今後「幻」が書き記されたものとして読まれていくようになるということが、示唆されている。ハバククも含む祭司・預言者の伝統が、後の正典編纂事業を為した。

使徒書日課(Ⅰヨハネ 2章より)

・「ヨハネの手紙 一～三」は、「ヨハネによる福音書」と密接な関係を持つ書簡であることが明らかで、同じ教会共同体(ヨハネの教会!)の中から生み出されたものであると考えられる。「手紙一」に著者名は記されず、「手紙二」「手紙三」も「わたし長老」としか名乗られていないが、「福音書」と共に伝統的に「ヨハネ」の名で呼ばれてきた。なお、「ヨハネの黙示録」は著者名に「ヨハネ」が明示されているが、同じ教会共同体の同じ「ヨハネ」であるか、古くから疑義がある。

・「手紙」は、ヨハネの教会共同体の中で神学上の対立から分裂が生じたことを背景に、正統的な立場がどこにあるかを告げ、そこに留まるようにとの勧告の書として著されている。「福音書」には、その神学的対立の芽と思われる議論がすでに見られるが、「福音書」全体はむしろ、「手紙」のような正統的立場を強調することを避け、より調停的な立場で包括的な共同体形成を目指すことを示唆していると考えられる。そこで、「手紙」は「福音書」と合わせて解釈されるべきである。

・22節「メシア」の原語は「キリスト」。「反キリスト(アンティキリスト)」は、「ヨハネの手紙」のみで用いられる用語で、初代教会で一般的であったわけではない。

・ヨハネの「福音書」および「手紙」で一貫しているのは、御子(イエス)について聞いたこと(御言葉)が人に留まるならば、その人はその御言葉を語り、その御言葉の根源である御父と一つに結ばれている、という信仰観である。「福音書」冒頭の「言葉(ロゴス)」論は、抽象的な観念としてではなく、主イエスという人を介して神(御父)と人とを結ぶ実体としての「御言葉」であり、人が現に聞き、心に留め、語るができるものである。「福音書」の文脈では、その御言葉は、何よりも主イエスが語られた御言葉そのものを意味するが、「手紙」の文脈では、それに加えて、主イエスについて証しして(弟子たちによって)語られた御言葉も、同党の意味を持つ。それは、「御言葉」を介して弟子たちには主イエスと同じ「油」が注がれ、「霊」における一致が実現している、と理解されうるからである。

福音書日課(ヨハネ 3章より)

・日課箇所は、「ニコデモ訪問」の逸話とそれに付随する解説に続く段で、主イエスが弟子たちと共に洗礼活動をされていたことに言及した上で、洗礼者ヨハネと人々との間の論争の逸話を描く箇所。ただし、洗礼者ヨハネの逸話の大半は、ヨハネが主イエスと自分の関係について説明する語りである。

・22～24節は主イエスと弟子たちの洗礼活動に関する報告で、この報告は4章冒頭(1～2節)に続報があるので、26～36節のヨハネに関する部分がこの報告の間に割り込んだ形で配置されていることが分かる。主イエスと弟子たちの洗礼活動は、ヨハネ福音書だけが伝える伝承で、共観福音書では復活後の宣教命

令の中に洗礼活動が含まれるのみである(マタイ 28:19)。ヨハネ福音書では、「水」に関する逸話を繰り返し取り上げることを通して「洗礼」についての主イエスの姿勢を示そうとしているが、ここでは、直前の「ニコデモ訪問」の逸話を受けて、「洗礼」が主イエスによって弟子たちに担わされた霊的な新生のしるしであることを明示しようとしているのだろう。

・このことを報告する短い伝承の間に「洗礼者ヨハネ」に関する段が割り込ませられているのは、そもそも「洗礼」がヨハネの宣教活動の中心であり、主イエスもそのヨハネから洗礼を受けた者として活動を始められた方であるため、そのヨハネの洗礼と主イエス(の弟子たち)の洗礼との関係性を明らかにする意図があったのだろう。ただし、両者の関係性については、共観福音書とも共通の理解を、ヨハネ福音書もすでに1章で洗礼者自身の言及として示している。

・洗礼者ヨハネの逸話は、ヨハネの弟子たちとユダヤ人との間で「清めのことで論争が起こった」ことを起因として描かれている。「清め」は、ユダヤ教徒が日常的に「水」を用いて行う宗教的慣行であるから、それと「洗礼」との違いについて議論となったのだろうか。

・31～36節を、新共同訳は洗礼者ヨハネの語りの一部と解釈して訳しているが、聖書協会共同訳は福音書記者の解説として訳している。後者は、3章前半と同様、語法の変化に基づいて、登場人物の語りと記者の語りを厳密に分けている。

来週の誕生日(6月21日～27日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-512 番「主よ、献げます」(= I 339 番「君なるイエスよ」)は、19世紀に女流詩人として知られたハヴァガルの作詞で、ある滞在先で経験した集団回心に感謝する中で作られたとされる。一時は広く歌われていたが、現在では、メソジスト讃美歌集のみで残る。

21-512「主よ、献げます」**Take My Life and Let It Be**

1. Take my life, o ments and my days; / let them flow in ceaseless praise. / Take my hands, and let them move / at the impulse of thy love. / Take my feet, and let them be / swift and beautiful for thee.
2. Take my voice, and let me sing / always, only, for my King. / Take my lips, and let them be / filled with messages from thee. / Take my silver and my gold; / not a mite would I withhold. / Take my intellect, and use / every power as thou shalt choose.
3. Take my will, and make it thine; / it shall be no longer mine. / Take my heart, it is thine own; / it shall be thy royal throne. / Take my love, my Lord, I pour / at thy feet its treasure-store. / Take myself, and I will be / ever, only, all for thee.